

Title	[12月24日 基調報告] 質疑応答
Author(s)	ウィルダン スニ; 遠藤, 清美; シャムスル リザル; 山本, 博之; フィルダウス ダウド
Citation	CIAS discussion paper No.25 : 災害遺産と創造的復興 : 地域情報学の知見を活用して = Warsan Bencana Alam dan Ekonomi Kreatif: Dari Segi Perspektif Ilmu Informatika Wilayah (Disaster Heritage and Creative Economy: From Perspective of Area Informatics) (2012), 25: 125-126
Issue Date	2012-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/228493
Right	© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

質疑応答

ウィルダン・スニ (シアクアラ大学防災学専攻) 遠藤さんに質問です。私の記憶に間違いなければ、東日本大震災の直後に天然ガスの輸出のことでインドネシアから副大統領が日本に行ったと聞いています。東日本大震災以降、日本のエネルギー問題と関連して、インドネシアの天然ガスを日本がどのように購入するのかといったことが話題になっていたと思います。このことについてなにかご存知だったりご意見があったりすればお願いします。

それから、シャムスル・リザル大学院長にシアクアラ大学の質についてお伺いしたいと思います。シアクアラ大学は国立大学の一つで、さまざまなカリキュラムを展開していますが、質という点ではインドネシアでどのようなレベルにあるとお考えでしょうか。

遠藤清美 私はその分野の専門知識をもっていないのでわかりませんが、日本は資源のない国で、特に天然ガスについてはかなりのシェアでインドネシアから輸入していることは事実です。それが安定的に今後とも日本に輸出できるようにという話をされたのかなと思いますが、詳しいことはわかりません。

なお、東ジャワのグンディ・ガス田で、JST-JICAのスキームでCO₂の回収と貯蔵の研究プロジェクトが来年度の新しいプロジェクト候補として予定されています。情報としてお伝えしておきます。

シャムスル・リザル シアクアラ大学の質ということですが、国際標準の基準で測ると、スマトラの大学のなかでシアクアラ大学は西スマトラのアンダラス大学に次ぐ二番めの地位になります。その意味で、シアクアラ大学は決して質が悪いわけではありません。

ただし、ジャワ島にある大学のようにはなかなかれません。これはなぜかという、正直に申しあげて、インドネシアの大学の事情はジャカルタに近ければ近いほど質が高いと評価されざるをえない部分があるためです。なぜなら、さまざまな研修の機会や情報はジャカルタに集中しており、アチェからジャカ

ルタに学びに行こうとすると費用がとてにかかるため、なかなかアチェの参加者はジャカルタの研修などに参加できないという事情があるからです。ましてアチェはジャカルタよりむしろマレーシアのクアラルンプールに学びを求める傾向があります。その意味で、地理的な条件から厳しい状況にあることは自分も理解しています。

しかしながら、繰り返し申しあげたいのは、シアクアラ大学は決して質が悪いわけではないということです。先ほど申しあげたように、スマトラではアンダラス大学の次の地位です。津波のあったアチェがアンダラス大学の次ということで、もし津波がなければスマトラになったのではないかと思うほどです。そういう意味で、誇りをもって、今後ともみなさん方の協力も得ながら本大学の地位と質の向上に努めたいと思います。

■ 防災学専攻の教員はどのような基準で選抜しているのか

山本博之 今日、朝早めに会場に来てワークショップの前に授業を見せていただいたのですが、授業の様子はとても興味深いものでした。先生が理論をきちんと説明して、それに対して学生たちが自分たちが住んでいる地域に関する実際のデータをもとに具体的に質問するというかたちで、とても活発に議論されていて、非常に質の高い授業がなされていると思いました。学生の何人かは社会で働いた経験を持っていて、それぞれの現場での事情を念頭に置きながら授業に臨んでいる様子がうかがえました。

また、この大学院の学生が中心になって組織されているこのワークショップの準備委員会のおかげで、とてもよく準備されたワークショップになっています。その意味でも、この大学院の学生の質がとても高いことにあらためて感銘を受けました。

現場での経験があって意識も高い学生が参加する授業では、実際にどのような質問が出てくるか予測できないために先生たちの準備も大変ではないかと想像します。特に災害というのはいろいろな分野から取り組む必要があるものなので、大学内でどのように工夫して教師陣を揃えているのかを教えてください。

シャムスル・リザル 防災学専攻は本大学院でも最も新しい専攻です。今年の6月に最初の学生が入ってきた専攻ですので、いわばまだお試し期間中であるといえます。教員たちは学内のさまざまな学部から出ていただいています。理学部、農学部、医学部、工学部、

教育学部など、ほぼすべての学部からスタッフを集めています。

カリキュラム等はまだ編成をいろいろと試みているところです。これから4年ほどのあいだにはカリキュラムを固めたいと思っていますので、その間に日本の先生がたもここのスタッフの教育・訓練また学生の教育・訓練にぜひお力やお知恵を貸していただければと思います。

■ 東インドネシアでも

このようなシンポジウムを組織できないか

フィルダウス・ダウド このようなシンポジウムやワークショップはたいへんよいと思いますが、私の印象ですと、私の出身のマッカサルを含めた東インドネシア地域ではあまり広がっていないような気がしま

す。東インドネシアでもこのようなシンポジウムやワークショップを開いていただくとよいと思うのですが、JICAからいらっしゃっている遠藤さん、いかがでしょうか。

遠藤 東インドネシアでもこのようなシンポジウムやワークショップを開いたらよいということには私も同感です。今回のプロジェクトはインドネシア側の機関であるバンドン工科大学やシアクアラ大学などとのプロジェクト協力の枠のなかで行っているので、今回のプロジェクト期間中は東インドネシアまで行けませんでしたが、しかし、災害はどこで起こるかわかりませんので、とくに防災教育や防災訓練はどこの町、どこの県でもやっていかなければならないことだと私は思っています。